浮世絵館だより

藤沢市
藤澤浮世絵館

2024年
6月
WEB版

（三代豊国）歌川国貞の役者見立東海道 歌舞伎役者の面影

役者絵と美人画を得意とした浮世絵師・歌川国貞（三代豊国）が嘉永五年～嘉永六年（一八五二～一八五三）にかけて制作した「東海道五十三次之内」（通称「役者見立東海道」）は、手前に歌舞伎役者を描き、背景に宿場の風景を描いた揃物です。本作は大変人気を得た作品で、最初に刊行されたものに加え、あとから図が追加され、百三十種類以上も描かれていることで知られています。当時の人気役者だけでなく、すでに故人となっていた人気役者も取り上げており、空摺や正面摺など凝った摺りの技法が施された豪華なシリーズです。

役者見立東海道を大解剖！

日本橋の図を例に「役者見立東海道」がどのように描かれているか紹介します。

【図１】歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次の内　日本橋　松魚※売」
※鰹の異名。鰹節の切り口が松の木の年輪に似ていることが由来とされています。

タイトル：枠には歌舞伎演目や歌舞伎役者に関連のある飾りがあしらわれています。

日本橋の図では鰹売りにちなんで鰹が描かれています。

背景：歌舞伎演目や登場人物に関連する東海道の風景。

江戸時代、魚河岸（魚市場）があり、江戸で初夏のグルメとして好まれていた初鰹が売られていた日本橋の風景が描かれています。

前景：歌舞伎の登場人物を演じる役者。

歌舞伎の所作事「四季詠寄三大字」に登場する鰹売りの格好をした三代目坂東三津五郎が描かれています。

役者見立東海道の出版事情

東海道を題材とした「東海道五十三次」の多くは、五十三の宿場にスタート地点の日本橋とゴールの京を加えた五十五点組となっています。

しかし、「役者見立東海道」は、最初に出版された五十五点のあとに、同じ宿場を描いた「その二」や「間（あい）の宿（しゅく）」（宿場と宿場の間に設けられた休憩場所）を取り上げたものなどが次々と追加されました。最終的には百三十点以上が制作され、他の東海道の揃物よりもはるかに多く壮大な構成となりました。

「役者見立東海道」の各作品は出版時期や特徴によって分類することができます。桑山童奈氏による論考「『役者見立東海道』研究」[1]をはじめとした先行研究や他機関の過去の展示でも、「役者見立東海道」の作品はグループ分けをして考えられています。ここでも先行研究にならい、「役者見立東海道」の作品をグループ1～4に分類して紹介していきます。

（1）桑山童奈（二〇〇五）『役者見立東海道』研究」『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』三十一号、四十一～五十八頁。

① 役者見立東海道の原点

最初の五十五点（以下「グループ1」）は嘉永五年（一八五二）の二月～六月にかけて出版されました。グループ1のみで「東海道五十三次」の揃物として成立しています。画面上部にある赤色の長方形にあるタイトルは、共通して「東海道五十三次之内　宿場名　役名」が書かれています。

また、同時期には目録も出版されました。

【図２】歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次の内
平塚　萬長娘　おこま」

◀「役者見立東海道」の目録

当市が所蔵する「役者見立東海道」の目録は黒一色摺で、揃物のタイトルが抜けていることから未完成の摺りだと思われます。他施設の所蔵する完成品には『役者見立東海道五十三駅』と題されています。

目録には「宿場名　役名　役者名」が記載されており、出版時にすでに亡くなっていた役者には名前の前に「故人」または「古人」と書かれていることもあります。

【図２】は目録に「平塚　萬長娘　岩井粂三郎」と記載されています。

【図３】歌川国貞（三代豊国）「題名不詳（役者見立東海道五十三駅）」

② 役者見立東海道のパート2!?

グループ2は嘉永五年八月～六年一月（一八五二-一八五三）にかけて出版されました。グループ1と同じく宿場を題材としていますが、目録には掲載されていない作品です。グループ1の作品とペアになることを意識して描かれたものが多い傾向にあり、タイトルの宿場名の後に「その二」などと書かれている図や、宿場名が同じグループ1のものと背景がつながるように描かれている図もあります。タイトルは「東海道五十三次之内　宿場名　役名」と書かれています。

【図４】【右】歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次の内　岡崎駅　政右衛門」グループ１
【図５】【左】歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次ノ内　岡崎駅　其二　政右衛門女房　お谷」グループ２

▲つながる背景
【図４】【図５】はどちらも岡崎宿の図で、背景がつながるように描かれています。これは最初に出版されたグループ１の作品に合わせてグループ２の作品が描かれたためです。

③ 宿場の間シリーズ

グループ3は嘉永五年（一八五二）九月～十一月にかけて出版されたグループです。グループ1と2は東海道の宿場が描かれたのに対し、グループ3は「間の宿」など宿場と宿場の間にある場所を背景に取り上げています。各図のタイトルは「東海道五十三次之内　宿場名　宿場名　間　地名　役名」です。

【図６】歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次之内　戸塚　藤沢間　吉田橋　松若」

▶吉田橋
グループ3で描かれている場所の一例を紹介します。【図6】はタイトルに「戸塚　藤沢間　吉田橋」と書かれていますが、背景には少し寂しげな風景があるだけで、吉田橋そのものは描かれていません。吉田橋は戸塚に流れる柏尾川に掛かる橋で、東海道と鎌倉へ向かう道との分岐点にありました。役者として松若丸が吉田橋に描かれたのは、京の公家である吉田家の子息という設定によるものです。

④ 役者見立東海道のイレギュラー

グループ4は嘉永五年八月～六年二月（一八五二－一八五三）にかけて出版されたグループで、グループ3と同じく東海道の宿場ではなく「間の宿」など宿場と宿場の間にある場所が背景に描かれています。

グループ1～3に携わっている彫師の「彫竹」と「彫巳の」が参加していないなど、他のグループと異なる点が散見されます。さらに、一番の違いはそのタイトルにあります。タイトルが赤色ではなく三色の長方形内に書かれていることに加えて、グループ4のみ「東海道　宿場名　宿場名間　地名　役名」と書かれ、「東海道五十三次之内」ではなく「東海道」から始まるのです。なぜこのような違いがあるのかは定かではありませんが、「役者見立東海道」全体で見るとイレギュラーなグループです。

【図７】歌川国貞（三代豊国）「東海道　藤沢平塚間　四ツ家　山帰り」

歌舞伎役者の面影

「役者見立東海道」はその名の通り、前景に描かれた歌舞伎の登場人物がすべて歌舞伎役者の似顔で描かれています。描かれた役者は当時現役の人気役者から往年の名優まで、それぞれの役に相応しい役者が選ばれています。このコラムで本展担当学芸員一押しのスターを二人紹介します。

当時をときめく二枚目スター
八代目市川団十郎
文政六年－嘉永七年（一八二三－一八五四）

【図８】歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次之内　島田　阿曽次郎」

本展で展示している「役者見立東海道」の八十九点のうち最も描かれている役者で、七点に登場しています。荒事で知られる代々の団十郎とは一味異なる、上品で柔らかみのある二枚目を得意とし、大人気の役者でした。人気絶頂のさなか、三十二歳の若さで亡くなり、死絵（歌舞伎役者を追善する浮世絵）が多く出版されました。

伝説的な悪役スター
五代目松本幸四郎
宝暦十四年－天保九年（一七六四－一八三八）

【図９】歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次之内　土山　水口間　松ノ尾　松王丸」

高い鼻と鋭い眼光が特徴的な役者で、俗に「鼻高幸四郎」と呼ばれました。悪役を得意とし、文化文政期（一八〇四－一八三〇）を代表する六名優の一人です。本揃物の出版時にはすでに故人でした。

『菅原伝授手習鑑』で松王丸を演じた際に、名場面「車引」で高い鼻を活かし、背を向け横顔で見得を切る「横見得」を披露し、現在まで続く型として残っています。